べてるの家に行ってきた。

それは、想像していたのとはちょっと違う、けっこう「普通」なところにあった。
国道沿いの、セブンイレブンの、すぐ隣にある建物、それが「べてる」だった。
これまでに聞いていた話からは、独特のグループホームとして、もう少し山奥というか、人里離れた地域での生活を営んでいるのかと思っていたのだが、カーナビに従って車を走らせていると、「目的地に着きました。案内を終了します」と機械が言う。「え、ここ？」と思うけれど、本当にそこがそうなので、「あら」と駐車する。この白い簡素な二階建ての建物は、正確には「べてる」の事務所と作業所を兼ねた中枢にあたるような建物で、「メンバー」の住居（いくつかの寮）や、食堂や「カフェぶらぶら」、また町の診療所などは少し離れて点在している。発足当初の「べてる」であった町の教会も、やはり少しばかり離れたところに静かにあたたかに建っている。見学初日のこの日は、「オリエンテーション」の後、その一帯を車で順繰りに廻りながら案内してもらった。そうして、「べてる」像が徐々に立ち現れてくる。思うのは、ほんとうに、地域に溶け込んでいる、ということ。「べてる」における種々の機能を担う建物が浦河（ウラカワ）の町中に点在している、ということもあるし、そのそも、「べてる」の一帯として案内してもらった建物の全てが「べてる」かどうかも、実は曖昧なのだ。「町の診療所」は独立した医療施設なのだし、「ルピナスの丘」だって、案内人の和田さんが「ここの景色がきれいなんです」と言って連れて行ってくれたように、ともすればおすすめの絶景スポットとして私たちに紹介してくれたようにも思える。そこは「施設」ではないし、建物ですらない。けれども、そこからの景色は「べてる」に暮らす人々にとってどれほど大切なものなのだろう。それは、病気に関係なく、人の心が落ち着く場所。この景色と共に、彼の人たちが暮らしている。そうなんだよな、とえらく腑に落ちたような気になる。その時はまだ日暮れには早すぎる時刻だったので、あとで夕日を見にまた来よう、ということになった。なだらかな丘に生える幾種類かの植物たちは、地域のおばちゃんが手入れをしているとのこと。海辺には、船と、倉庫が立ち並び、すぐ脇を国道が走っている。

施設の内と外の境界線の曖昧さと言えば、最後までわからなかったのは、「メンバー」と「スタッフ」の区切りだった。この人はスタッフさん、と思っていた人から、「当事者」であるとカミングアウトされることが相次いだ。彼らはそれぞれの「自己病名」を持っている。はじめ、ほんとうに驚く。しかし言われてみればそうかもしれない、などと思い始める。そうして「いやいやそれでも…」などとしばらく考えを巡らせた末、もう一度驚く。「やっぱりここすごいなぁ」と。
そもそも、一人の人間に対して「病名」がつくかつかないか、それは実にデリケートな問題である。「正常」と「病理」の境界は紙一重である。—そんなことは、私たちの学際研究のスターティングポイントでもあるのだから、わかっていたはずだった。けれども、そうした人間と病気の関係の曖昧さが、こんなにも自然なかたちで、組織のなかに「生きている」、そのことにはやはり驚いた。スタッフも、想像の域を超えて、その多くが、病気の当事者なのであった。

彼らは、正直だった。言っていることは、ある意味で「嘘」だらけのことがある。そこで語られる内容は、他人と共有されている世界に端を発してはいない、いわゆる妄想であることが、しばしばある。ただ、その言葉が妄想かどうかを確かめる術は無かった。その真偽について判断を下すことは誰にもできない。問われてい

るのは、私はその話を信じるのか、あるいは受け流すのか、ということだけだ。そこに長く出入りしている人は、どうやらその塩梅を心得ている。けれども私には、昨日初めて会ったばかりの彼らの話をいい具合に受け取り、また受け流すことは難しく、彼らと話すことは、「なにがほんとう？」という問いのもとに世界の認識がぐらぐらと揺らぐような体験でもあった。それは実際苦しい時間だった。

ただ、その一方で、私たちは度々、彼らに惚れ惚れしてしまう。なんて嘘の無い人たちなのだろう、とつよく感じるからだ。殊に彼らのリアクション、他人の言動へのリアクションにおける嘘の無さは、こちらがなんだか日頃の自分を振り返って恥ずかしくなるくらい、素朴で正直なものだった。また、彼らがふと口にする一言が、まるで人生の格言のように的を射て力強いということもよくあった。

彼らの正直さとは何だったのだろう。思うに、そこには一貫して、嘘か本当かという判断を保留し、率直に語られる言葉があった。その人が今そうであるということに関しては、いつだって誰だって一切嘘がない…はずなのだけれど、ついつい私たちは、勝手な真善美の価値判断によって自分を整えようとして、裸の言葉を気づかぬうちに「ないもの」にしてしまう。もちろん、そこでの価値判断というのは「文化の継承」によって脈々と築かれてきた「私たち」の習性として、大切にしたいものだったりもする。それでも、往々にしてそれらは過剰であったりする。だから、そうした価値判断が来るより速く即興的に放たれる言葉たちは、辛辣なまでに心地よかった。「常識」のもとで一度壊れてしまった人たちの暮らしに、ごまかしは効かない。「外見上の話はいくらでもできるよ。でも私たち、そうはいかないよね。」[1]という表現には、端的に射抜かれる心地がした。

そう、彼らは「がんばらない」。価値判断に先取りされて、自分を取り繕うために無理をするという意味での「がんばり」は、しっかりと放棄するのだ。それでも不思議なことに、彼らの一日は、「今日も一日がんばりましょう」という言葉で始まっていた。「がんばらない」というスローガンと、「がんばりましょう」という、朝の会を締めくくる声。この矛盾が、なんとも妙だった。壊れるほどの無理を知っている者が、その限りで、その日の労働を「がんばりましょう」と言って始める姿は、暮らしの流れのなかでどこまでも普通に、けれどもものすごい重い真実味を持ってこちらに伝わってきたのだった。

そうして始まった一日のなかで、彼らは上手に「さぼる」。煙草を吸いに外のベンチまで出て、そこで人と喋って、また気の向くままに仕事場に戻ったりする。あるいは、畳のスペースで横になっていて、その日は「お休み」にしているらしい人の姿もある。そして、夕方のミーティングでは、各々がその日の就労時間を「自己申告」するのだ。―このシンプルな仕組みについて、その時には特になんとも思わなかったのだが、ふと考える…私には、この仕組みはキツイかもしれない、と。嘘をついたり見栄をはったりする私にとっては、こうして一日の就労時間を潔く公開するというのは、実は難しいことなのではないか。さぼっても、それはうまいことごまかしたい。明日をあてにして、いつかどこかで帳尻を合わせられればいいという考え方が、どこかにある。「強がり」が、人も自分もごまかしている。そして、べてるに心底教えられるのだった。「弱さの情報公開」のありがたさ、大切さを。

---

[1] べてる通信 No.3（2018.3.26）「へなへなの言葉」（べてるで日々生まれる「言葉」を紹介するコーナー）より。以下引用：ベデスダ、グッズチームのミーティングより、小川さんの言葉。「ケンカになってもいいから本根（ママ）を話してほしいよね。心をオープンにすると、相手の笑顔が目に浮かぶよ。」弱さを出せずにいるメンバーとスタッフに向けての言葉でした。

べてるの理念の一つである「弱さの情報公開」。それによって人々は、自分の「弱さ」を一人の内に抱え込むのではなく、公の場に表す。するとそれは共有されて、ではその状況でやっていきましょう、ということになる。弱さは、その人のせいではないのだから、と考える。

そう、彼らは「病」すら「もてなす」のだ。「もてなす」というやり方によってそれを「ないものにしない」。ネガティブな思考が訪れた時、それは自分のせいではなくて、そういう「お客さん」がやって来た、と捉える。そうした「外在化」の作業を通して、その訪問を「もてなし」、そして、やがてはそのお客さんのくどい「誘い」に対しては丁寧にお断りできるようにもなる[2]。

弱さとのコミュニケーション。それは、弱さをないものにしないというところから始まっていると思った。「向き合う」と言えばかっこいいが、おそらくその一歩手前、肌にくっついてるかくっついていないか微妙なところで、その「お客さん」はやってくるのだろう。それでもそれと同化せず、ごまかさず、若干の距離を取って、話を聞いてみる。やがて付き合いが始まる。そうなってくると、病気は必ずしも「治す」ものではなくなる。「治りませんように」という言葉は、病気とお付き合いする人の姿を、やさしく適確に言い当てる。

「治りませんように」というのは、私がべてるの家について知る端緒となった、本屋でふと見かけた本のタイトルだった。妙に印象に残って、その後しばしば思い出すこともあった。人の不器用さが、不器用さのままで生き残っていきますように。それによって辛いのだけれど、それでもその味を噛みながら、このペースで暮らせますように。そんな風に、日々のなかで、自分についてまた目に映る人について、ふと願う時があった。そして、ああ、治りませんように、とかつて出会った言葉が重なるのだった。

そして数年の時を経て、いざ出会った、本物のべてるの家。感想は、まとまらないままだ。そこで会った人たちの声、眼、手は、生々しく思い出せるのだが。ただ少なくとも、「治りませんように」という言葉は、その生々しさによって更新されたように思う。一切の感傷的な響きは消え去って、あっけらかんとした、ユーモア溢れる印象をまとった言葉として、「治りませんように」というフレーズはある。

べてるの家の見学、それは北海道という遠い地、しかも、札幌から車をだいぶ走らせた先の辺鄙な浦河の地への、「旅」だった。非日常に触れる時間だった。旅が終われば、私たちは各々の場所へ戻っていく。なんともいえない感触はずっと残されて、時折「元気かなあ」と彼らを思い出す。

見学中は、色々な私が顔を出していた。そもそもの立場でありながらも意外と影が薄かったのは「教育学研究科の大学院生」である私。べてるの人々の即興的なコミュニケーションの見事な面白さに舌を巻いたのは、演劇に携わっている私。様々な「決めつけ」を取っ払った次元に生きている彼らの清々しい姿に、我が身を振り返って痛い気持ちがしたのは、「教師」の血を引く私。―こうした様々な面で接してみれば、べてるとの出会いは、うれしくて、怖くて、恥ずかしくて、疲れて、心身共に元気をもらうような、不思議なものだった。

残された宿題は大きい。さしあたり、彼らの即興的な（非連続的な）あり方について、またそれを支える基盤（連続的な信頼）について、もう少し探りたいと思っている。きょうも一日、がんばりましょう。

2018 年 5 月 8 日

柳澤友里亜

---

[2] 参考：『精神障害と教会 教会が教会であるために』（向谷地生良著, いのちのことば社, 2015 年）p.35